

狭野弟上娘子と東歌防人歌を中心に

北川和秀

【陸奥国の前の采女】

安積香山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに（一六・三八〇七）

右の歌は、伝へて云はく、葛城王陸奥国に遣さえし時に、国司の祇承の緩怠なること異に甚し。時に、王の意に悦びず、怒の色面に顕る。飲饌を設くと雖も、肯へて宴樂せず。ここに前の采女あり、風流たる娘子なり。左の手に觴を捧げ、右の手に水を持ち、王の膝を撃ちて、この歌を詠みき。すなはち王の意解け悦びて、樂飲すること終日なりきといへり。

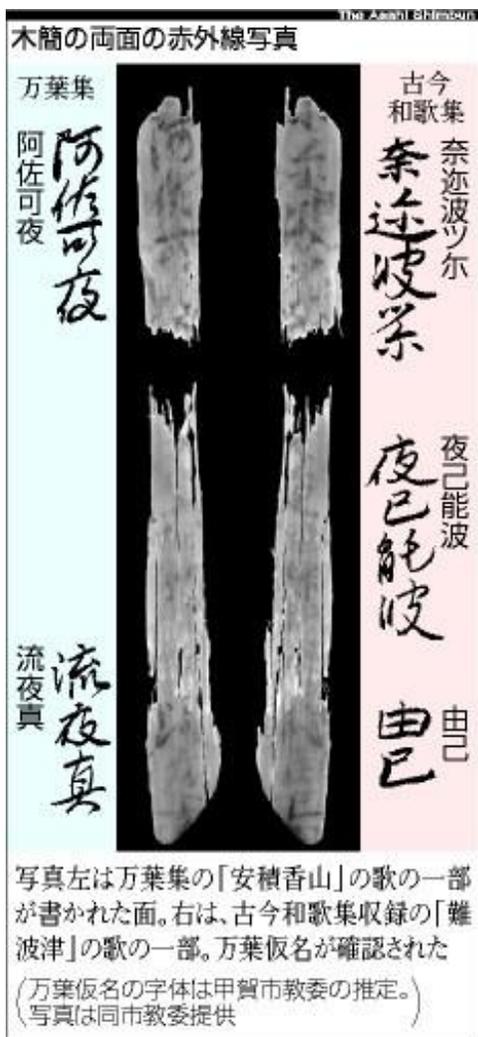
《参考》

* 歌木簡：滋賀・紫香樂宮跡で発見 万葉集の成立過程に光

奈良時代に聖武天皇が造営した紫香樂宮の跡とされる宮町遺跡（滋賀県甲賀市信楽町）で出土した木簡（8世紀中ごろ）に、日本最古の歌集である万葉集に収録された「安積山の歌」が書かれていたと22日、市教委が発表した。万葉歌が書かれた木簡が見つかったのは初めて。万葉集とは表記が全く異なっていた。もう一つの面には「難波津の歌」が書かれており、この2首を歌の手本とする伝統が、平安時代に編さんされた古今和歌集の時代から万葉集の時代まで約150年さかのぼって確かめられた。日本文学の成立史に見直しを迫る画期的な実物史料となる。……（中略）……

両面とも日本語の1音を漢字1字で表す万葉仮名で墨書され、安積山の歌は「阿佐可夜」「流夜真」の7字、難波津の歌は「奈迓波ツ尔」などの13字が奈良文化財研究所の赤外線撮影で確認された。文字の配列などから元の全長は2尺（約60.6センチ）と推定される。字体や大きさが異なり、別人が書いたとの見方が強い。……（中略）……

2首は、古今和歌集の仮名序（905年）に「歌の父母のように初めに習う」と記され、源氏物語などにも取り入れられている。筆者の紀貫之の創作の可能性もあったが、古くからの伝統を踏まえていたことがわかった。（毎日新聞 平成二〇・五・二三朝刊）



木簡の両面の赤外線写真

古今和歌集 奈迹波ツル
 夜己能波
 由己
 万葉集 阿佐可夜
 流夜真

写真左は万葉集の「安積香山」の歌の一部が書かれた面。右は、古今和歌集収録の「難波津」の歌の一部。万葉仮名が確認された
 (万葉仮名の字体は甲賀市教委の推定。)
 (写真は同市教委提供)

* 難波津の歌は、帝のおほむはじめなり。

大鷦鷯の帝の難波津にて皇子と聞えける時、東宮をたがひに譲りて位に即きたまはで、三年になり
 につれば、王仁といふ人のいぶかり思ひて、よみて奉りける歌なり。この花は梅の花をいふなるべし。

安積山の言葉は、采女の戯れよりよみて、

葛城王を陸奥へ遣したりけるに、国司、事おろそかなりとて、設けなどしたりけれど、すさま
 じかりければ、采女なりける女の、かはらけ取りてよめるなり。これにぞ王の心とけにける。

この二歌は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人の初めにもしける。(古今集仮名序)

【遣唐使の母】

天平五年癸酉、遣唐使の船、難波を発ちて海に入る時に、親母の、子に贈る歌一首短
 歌并せたり

秋萩を 妻問ふ鹿こそ 独子に 子持てりといへ 鹿児じもの わが独子の 草枕 旅に
 し行けば 竹珠を しじに貫き垂り 斎瓮に 木綿取り垂でて 斎ひつつ わが思ふ吾子
 真幸くありこそ(九・一七九〇)

反歌

旅人の宿りせむ野に霜降らばわが子羽ぐくめ天の鶴群(一七九一)

【遣新羅使人の縁者】

新羅に遣はさえし使人ら別を悲しびて贈答し、また海路にして情を勤み思を陳ぶ。所に当りて誦する古歌を并せたり（そのうちの一首）

君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ（一五・三五八〇）

【狭野弟上娘子】

中臣朝臣宅守の、蔵部の女孀狭野弟上娘子を娶きし時に、勅して流罪に断じて、越前国に配しき。ここに夫婦の別れ易く会ひ難きを相嘆き、各々勤む情を陳べて贈答する歌六十三首（万葉集目録）（そのうちの狭野弟上娘子の歌四首）

中臣朝臣宅守と狭野弟上娘子との贈答の歌

あしひきの山路越えむとする君を心に持ちて安けくもなし（一五・三七二三）
君が行く道のながてを繰り畳ね焼きほろぼさむ天の火もがも（三七二四）
帰りける人來れりといひしかばほとほと死にき君かと思ひて（三七七二）
わが背子が帰り來まさむ時の為命残さむ忘れたまふな（三七七四）

【豊前国の娘子大宅女】

豊前国の娘子大宅女の歌一首 未だ姓氏を審らかにせず

夕闇は路たづたづし月待ちて行かせわが背子その間にも見む（四・七〇九）

【作者不明】

春雨に衣はいたく通らめや七日し降らば七日来じとや（一〇・一九一七）
わが屋前の花橘は散りにけり悔しき時に逢へる君かも（一九六九）
玉垂の小簾のすけきに入り通ひ來ね たらちねの母が問はさば風と申さむ（一一・二三六四）
うつせみの常の言葉と思へども継ぎてし聞けば心はまとふ（一二・二九六一）

つぎねふ 山城道を 他夫の 馬より行くに 己夫し 歩より行けば 見ることに 哭のみ
し泣かゆ そこ思ふに 心し痛し たらちねの 母が形見と わが持てる 真澄鏡に
蜻蛉領巾 負ひ並め持ちて 馬買へわが背(一三・三三一四)

反歌

泉川渡瀬深みわが背子が旅行き衣濡れにけるかも(三三一五)

或る本の反歌に曰はく

真澄鏡持てれどわれは駿なし君が歩行よりなづみ行く見れば(三三一六)

馬買はば妹歩行ならむよしゑやし石は履むとも吾は二人行かむ(三三一七)

右四首

【東歌・防人歌】東歌は卷十四・防人歌は卷二十

日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なのが袖もさやに振らしつ(三四〇二) 上野

信濃道は今の墾道刈株に足踏ましなむ履着けわが背(三三九九) 信濃

信濃なる千曲の川の小石も君し踏みてば玉と拾はむ(三四〇〇) 信濃

稻舂けば輝る我が手を今夜もか殿の若子が取りて嘆かむ(三四五九) 未勘国

赤駒を山野に放し捕りかにて多摩の横山徒歩ゆか遣らむ(四四一七) 武蔵防人妻

色深く背なが衣は染めましを御坂たばらばま清かに見む(四四二四) 宇遅部黒女(武蔵)

防人に行くは誰が背と問ふ人を見るが羨しさ物思もせず(四四二五) 昔年防人妻